

学校不信の時代に

今、学校不信の声が高いやうですが、学校教育では能力が養へないことを親たちがよく知っています。その能力が養へない理由には、今の教師からが昔の教師たちよりも能力が低く意欲にも欠けてあることもあります。その最も大きな理由は、“学”だけがあって“習”が無いといふことにあるのです。

学校不信の声に反して“学習塾”の評判が良いのは、文字通り“学”と“習”とが並び行はれてゐて、そのため能力が育つからでせう。論語の冒頭に「学びて時にこれを習ふ。また悦ばしからずや」とあります。「学んでこれを習ふ」から、それまで出来なかった事が出来るやうになるので、だから「それが何とも喜ばしい」といふのです。

今ほど教育の重要性が叫ばれ、その方法が論ぜられてゐる時代はないでせう。しかし、「船頭多くして船山に上る」で、教育が声高に論ぜられれば論ぜられるほど、枝葉末節に走ってその実が無いやうです。今こそ教育の原点に立ち戻って、そこから考へ直すべき時であると思ひます。

ところで、私は本書を“歴史的かなづかひ”に拠って書いてきました。そもそも“かなづかひ”とは、かな文字の使ひ方の約束であって、それ

は過去から現在、未来にわたって通ずるものでなければならぬ、と考へるからです。

例へば、英語の“one”といふ綴りを御覧頂きたいのですが、ワンといふ発音とは思へない綴りです。それもそのはず、この綴りは16世紀におけるオウニーといふ発音を表したもののなのです。この言葉はオウンと変り、ウォウンと変り、今はワンと発音します。言葉は変りましたが、綴りは変へなかったのです。ですから、16世紀の書物が今でも読めて解るのです。もしも綴りを発音通りに書くやうに変へてみたら、とても読めたものではありません。

戦後、国語審議会は“歴史的かなづかひ”は難しいからといふ理由で“現代かなづかい”に変へました。「難しくても必要なら何としてでも出来るやうに教へる」のが教育といふものです。国語審議会の取った態度は全く非教育的なものでした。

幸ひ今の国語審議会は“歴史的かなづかひ”の重変性を認め、その学習を励めてゐます。しかし、世の中にその手本が少ない現在、その学習は至って困難です。世の人々に少しでも“歴史的かなづかひ”に慣れて頂きたいといふ思ひでこれに拠った書き方をする次第です。